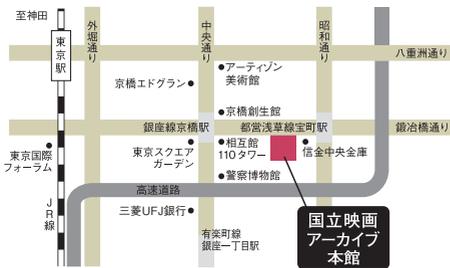




国立映画アーカイブ 本館



〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6

東京メトロ銀座線京橋駅(出口1)から
 昭和通り方向へ徒歩1分

都営地下鉄浅草線宝町駅(出口A4)から
 中央通り方向へ徒歩1分

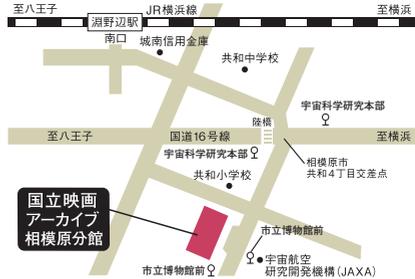
東京メトロ有楽町線銀座一丁目駅(出口7)から徒歩5分

JR東京駅(八重洲南口)から徒歩10分

お問い合わせ：ハロ－ダイヤル 050-5541-8600 ホームページ：www.nfaj.go.jp



国立映画アーカイブ 相模原分館



〒252-0221 神奈川県相模原市中央区高根3-1-4

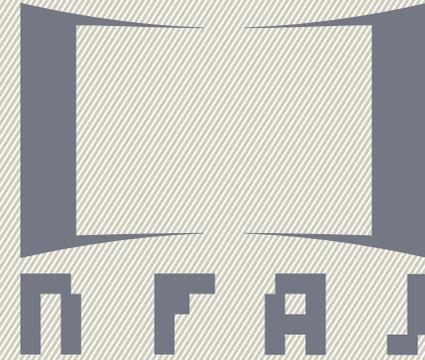
JR横浜線淵野辺駅(南口)から
 徒歩15分

神奈川中央交通バス2番乗り場
 [淵37] 博物館通り 淵野辺駅南口行 青葉循環(左廻り)
 もしくは[淵36] 共和廻り 淵野辺駅南口行 青葉循環
 (右廻り)で「市立博物館前」下車すぐ

小田急線 相模大野駅(北口)から
 神奈川中央交通バス5番乗り場
 [相02] 相模原駅南口行「宇宙科学研本館」下車、
 徒歩5分

 長瀬映像文化財団
 国立映画アーカイブは長瀬映像文化財団の支援を受けています。

表紙(左→右):長瀬記念ホール OZU、重要文化財『史劇 楠公訣別』(1921年)35mm可燃性オリジナルネガフィルムからの反転ポジ像、展示室(常設展)、大藤信郎『カツラ姫』(1937年、荻野茂二『色彩漫画の出来る迄』収録)より



国立映画アーカイブ

National Film Archive of Japan

日本で唯一の国立映画機関 国立映画アーカイブ

国立映画アーカイブは、日本で唯一の国立の映画専門機関です。
映画文化の振興をはかる拠点として、次の機能を備えています。

映画を保存・公開する拠点としての機能

映画に関するさまざまな教育拠点としての機能

映画を通じた国際連携・協力の拠点としての機能

国立映画アーカイブ本館(京橋)

長瀬記念ホール OZU (2階)・小ホール(地下1階)

上映時間：企画ごとに1日2～3回の上映が行われます。詳細は当館ホームページでご確認いただくか、ハロウダイヤルにお問い合わせください。 休映日：月曜日/上映準備期間/休館日

展示室(7階)

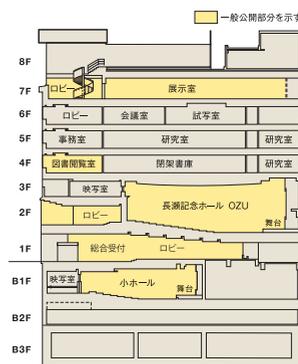
開室時間：11:00～18:30(入室は18:00まで) 休室日：月曜日/展示替期間/休館日

図書室(4階)

開室時間：12:00～18:00(入室は17:30まで、複写受付は17:15まで)
休室日：日曜日・月曜日・水曜日・祝祭日/特別整理期間/休館日

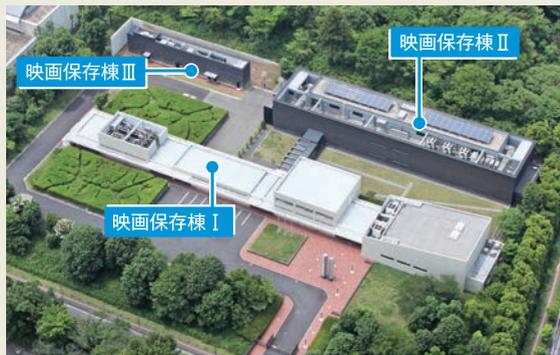
京橋本館 敷地面積：788㎡ 延床面積：6,903㎡

区分	床面積(㎡)	主要内訳	㎡
7階	716	展示室	336
		ロビー	142
6階	716	会議室・ロビー	239
		試写室・映写室	153
5階	716	事務室・研究室	461
4階	716	図書閲覧室	140
		閉架書庫	179
3階	510		
2階	714	長瀬記念ホール OZU	266
		ロビー	139
1階	687	総合受付	96
		ロビー	102
地下1階	645	小ホール	175
		ロビー	88



国立映画アーカイブ年表

1952年	6月6日	国立近代美術館(1967年以降は東京国立近代美術館)が設置され、事業課普及広報係の事業の一つとして映画事業(フィルム・ライブラリー)開始。建物は東京・京橋の旧日活本社ビルを改装工事して利用。	2003年	4月	「映画振興に関する懇談会」において、「これからの日本映画の振興について～日本映画の再生のために～(提言)」がまとめられ、フィルムセンターの美術館からの独立が掲げられる。
1960年	12月	映画界が「フィルム・ライブラリー助成協議会」(1970年にフィルム・ライブラリー協議会に改称)発足。以後、永田雅一理事長、川喜多かしこ常務理事の下、フィルム・ライブラリーの拡充にむけた支援・協力、請願活動が行われた。	5月	フィルムセンターが初めてデジタル復元を試みた『斬人斬馬剣』(伊藤大輔監督 1929年)を『発掘された映画たち2003』で上映。	
1967年	11月	終戦後GHQに接収された日本映画フィルム約1,300本の返還協定締結。	2004年	9月	「フィルムセンターの在り方に関する検討会」において、「フィルムセンターの独立について(審議のまとめ)」が取りまとめられる。
1969年	4月1日	東京国立近代美術館にフィルムセンター設置。美術館本館が北の丸公園に移転後、京橋の建物を専用施設として活用することが決まる。	2007年	4月	FIAFとの共催で、「第63回FIAF東京会議2007」をフィルムセンターで開催。
1970年	5月27日	フィルムセンター開館式。「アメリカ古典映画の回顧」の企画上映開催(5月28日～8月1日)。1階には常設の展示スペースも設置。	7月	文化庁(文化財部美術学芸課)と共同で「近代歴史資料緊急調査(映像フィルム・映画関係分野)」を実施。	
1971年	9月	文部省保管の映画フィルムが管理換される。	2009年	5月	フィルムセンター主幹・岡島尚志がFIAFの会長に就任(～2011年)。
1978年	11月1日	前年にフィルム・ライブラリー協議会から寄贈された図書を基に図書室を開室し、一部を公開。	7月10日	『紅葉狩』(柴田常吉撮影、1899年)の所蔵35mm可燃性デュープネガフィルムが、映画フィルムとして初めて重要文化財に指定される。	
1984年	9月3日	フィルムセンター5階より出火し、建物の一部と外国映画フィルムの一部320作品を焼失。18日「フィルムセンター焼失フィルムのための募金の会」(代表:川喜多かしこ、高野悦子)発足。以後上映は、新館オープンまで竹橋の東京国立近代美術館講堂で行った。	2010年	1月3日	フィルムセンターが2008年に共同して実施した『羅生門』(黒澤明監督、1950年)のデジタル復元が全米映画批評家協会賞を受賞。
1986年	1月31日	フィルムセンター相模原分館(設計:芦原義信氏)竣工。3月13日に竣工式挙行。	6月29日	『史劇 楠公訣別』(1921年)の所蔵35mm可燃性オリジナルネガフィルムが、重要文化財に指定される。	
1988年	7月	文化庁(文化部芸術課)より、フィルムセンターの充実を提言した答申「映画芸術の振興について[中間とりまとめ]」が出される。	2011年	2月	新常設展「NFCコレクションでみる 日本映画の歴史」とともに展示室をリニューアル。
1989年	8月	「優秀映画鑑賞推進事業」を開始。	3月30日	相模原分館に増築棟竣工。	
	11月	国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)にオブザーバーとして加盟。	6月27日	『小林富次郎葬儀』(1910年)の所蔵35mm可燃性オリジナルネガフィルムおよび上映用ポジフィルムが、重要文化財に指定。	
1992年	10月10日	前年寄贈され復元を終えた伊藤大輔監督の『忠次旅日記』(1927年)の特別上映会を開催。	2013年	4月	ホームページに「NFCデジタル展示室」を開設。
1993年	5月	FIAFの正会員となる。	2014年	3月28日	重要文化財映画フィルムなどを主に保管する「映画保存棟III」が相模原分館に竣工。
1994年	8月	文化庁(文化部芸術課)が、報告書「映画芸術振興方策の充実について」をまとめ、フィルムセンターが映画芸術振興の拠点として機能を十分に発揮できるようにする必要が強調される。	3月	京橋および相模原分館の映写機器を更新し、京橋にデジタルシネマシステムを導入。	
1995年	5月12日	東京国立近代美術館フィルムセンターを新たに開館。前日の5月11日に開館式を挙行。	10月	文化庁の美術館・歴史博物館重点分野推進支援事業に採択された「映画におけるデジタル保存・活用に関する調査研究事業」(通称BDCプロジェクト)を開始。	
2000年	3月	ロシアのゴスフィルムフォンドで発見された戦前の日本映画の収蔵を開始。以後5年度にわたり347本が里帰りを果たす。相模原分館のフィルム保存庫を改築し、ビネガー・シンドローム専用室が竣工。	2017年	1月	BDCプロジェクトの研究成果として「映画におけるデジタル保存と活用のためのシンポジウム」を開催。
2001年	4月1日	独立行政法人国立美術館が発足し、その一組織となる。	2月	BDCの一環として、国立情報学研究所(NII)との共同により配信サイト「日本アニメーション映画クラシックス」を公開。	
2002年	11月27日	展示室が映画関連資料専用のスペースとして再開室、「展覧会 映画遺産」を開催。	2018年	4月1日	独立行政法人国立美術館の6番目の館「国立映画アーカイブ」として設立。
			2021年	9月	NIIとの共同により配信サイト「関東大震災映像デジタルアーカイブ」公開。
			2023年	3月	NIIとの共同により「フィルムは記録する—国立映画アーカイブ歴史映像ポータル—」公開。
			5月		NIIとの共同により「映画遺産—国立映画アーカイブ映画資料ポータル—」公開。



A映画保存棟Ⅱの映画フィルム検査室 B映画保存棟Ⅱの可動棚 C京橋本館の収蔵庫に保存されているスチル写真
D重要文化財『小林富次郎葬儀』35mm可燃性オリジナルネガフィルム
E重要文化財『紅葉狩』35mm可燃性デュープネガフィルム

保存 収集・保存・復元

国立映画アーカイブでは、日本映画、外国映画を問わず、残存フィルムを可能な限り収集することを原則に、劣化の進行や廃棄・散逸の危険があるフィルム、希少性の高いフィルム、上映や国際交流事業に必要なフィルム等を優先して、計画的に収集しています。

寄贈や購入などで受け入れたフィルム(デジタル作品を含む)は、専従スタッフによる検査を経て、保管・目録化されます。劣化や損傷の危険性があるフィルムや希少性の高いフィルム、滅失の危険がある可燃性フィルムなどについては、複製作業を通じ、長期保管を図るための保存に努めています。また、芸術的、歴史的、資料的に価値の高い映画フィルムについては、コンテンツのより忠実な再現をめざし、高度な技術による復元を行っています。

またポスター・スチル写真・シナリオ・プレス資料・技術資料といった映画関連資料も積極的に収集しており、目録化を行った上で、適切な温湿度環境での保存に努めるとともに、材質に応じた修復にも取り組んでいます。

神奈川県相模原市のキャンブ淵野辺跡地に位置する国立映画アーカイブ相模原分館では、映画フィルム及び映画関連資料を、24時間空調システムによる管理のもと、適切な温湿度環境で安全に保護するとともに、映画フィルムの検査やデータの採取、出入庫作業などを行っています。

相模原分館には保存庫を主とした3棟の映画保存棟があります。映画保存棟Ⅰには映写ホールが付設され、検査用の業務試写に加え、近隣施設との連携事業などを実施しています。映画保存棟Ⅱでは、映画関連資料の保管も行うとともに、ピネガー・シンドローム対策や効率的な動線、厳重なセキュリティ態勢を整えています。映画保存棟Ⅲは、重要文化財指定フィルムなどを主に保管しています。

所蔵映画フィルム数 (2024年3月末現在)

所蔵日本/外国映画の内訳		
日本映画	劇映画	14,401本
	文化・記録映画	32,511本
	アニメーション映画	2,818本
	ニュース映画	16,671本
	テレビ用映画	9,998本
	その他	1本
計		76,400本
外国映画	劇映画	6,419本
	文化・記録映画	3,373本
	アニメーション映画	402本
	ニュース映画	189本
	テレビ用映画	467本
計		10,850本
合計		87,250本

所蔵映画関連資料数 (2024年3月末現在)

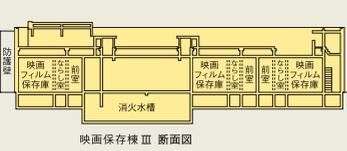
映画関係図書(和書)	49,201点
映画関係図書(洋書)	5,702点
シナリオ	約51,000点
ポスター	約63,000点
スチル写真	約817,000点
プレス資料	約94,000点
技術資料	約800点

国立映画アーカイブ 相模原分館 敷地面積：14,997㎡

映画保存棟Ⅰ	
フィルム収納能力	約22万巻
温湿度	地下1階 映画フィルム保存庫 温度10℃(±2℃) 湿度40%RH(±5%RH)
	地下2階 映画フィルム保存庫 温度5℃(±2℃) 湿度40%RH(±5%RH)
階別面積	(㎡)
1階	1,477
2階	296
地下1階	1,369
地下2階	1,369
用途別面積	
映画フィルム保存庫(18室)	2,885
映写ホール(200席)	526
事務室・映画フィルム検査室	692
その他	407

映画保存棟Ⅱ	
フィルム収納能力	約26万6千巻
温湿度	1階 映画文献資料室 温度10℃(±2℃) 湿度21℃(±2℃) 湿度50%RH(±5%RH)
	地下1階 映画フィルム保存庫 温度2～10℃(±2℃) 湿度35%RH(±5%RH)
	地下2階 映画フィルム保存庫 温度2～10℃(±2℃) 湿度35%RH(±5%RH)
階別面積	(㎡)
1階	995
2階	363
地下1階	1792
地下2階	1777
用途別面積	
映画フィルム保存庫(20室)	2,144
映画文献資料室(2室)	158
映画技術資料室	174
映画フィルム検査室	100
その他	2352

映画保存棟Ⅲ	
フィルム収納能力	1,152巻
温湿度	1階 映画フィルム保存庫 温度2℃(±2℃) 湿度35%RH(±5%RH)
	1階 ならし室 温度5～15℃(±2℃) 湿度35%RH(±5%RH)
	1階 前室 温度26℃(±2℃) 湿度50%RH(±5%RH)
階別面積	(㎡)
1階	131
PH階	7
用途別面積	
映画フィルム保存庫(3室)	45
その他	93



公開 上映

本館2階の長瀬記念ホール OZUと地下1階の小ホールでは、監督・俳優・製作国・ジャンル・時代など、さまざまなテーマにあわせた特集上映を行っています。上映プログラムには芸術的・映画史的に重要な作品だけでなく、時事的・文化的に貴重な映画や、発掘・復元された作品なども含まれています。フィルム・ライブラリー時代も含め、当館で2024年12月までに上映した作品は、1万作品以上になります。



長瀬記念ホール OZU エントランス



長瀬記念ホール OZU ロビー

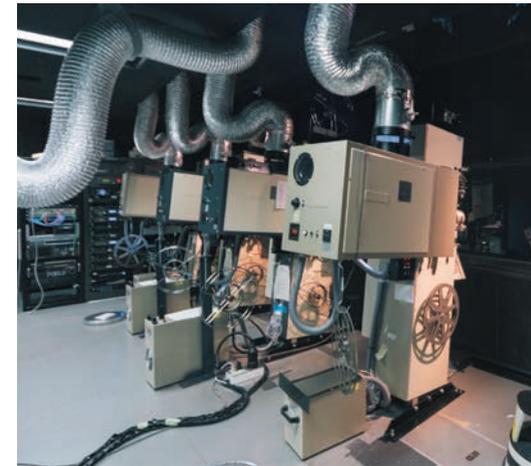
長瀬記念ホール OZU



小ホール



スクリーンは、上下左右に可動するバリアブルマスクによって、作品に合わせた画面比に調整することができる



長瀬記念ホール OZU フィルム映写機
毎秒10～30コマまで映写速度を変えることができる。
中央の2台が70mm/35mm兼用機、両端2台が16mm



長瀬記念ホール OZU デジタル映写設備
シネマサーバーはDoremi製IMB4K。
再生可能なメディアは、DCP、HDCAM-SR、
HDCAM、デジタルベータカム、MPEG-IMX、
ベータカムSX、ベータカムSP、HDV、S-VHS、
Blu-ray、DVD。

ホール概要

	長瀬記念ホール OZU	小ホール
座席数	310	151
床面積	306㎡	190㎡
スクリーン(布地)	4.6m×9.7m	3.3m×8.7m
スタンダード(1:1.37)	4.00m×5.50m	3.00m×4.11m
ヨーロッパアン・ピスタ(1:1.66)	4.00m×6.64m	3.00m×4.98m
アメリカン・ピスタ(1:1.85)	4.00m×7.40m	3.00m×5.55m
シネマスコープ(1:2.35)	4.00m×9.40m	3.00m×7.05m
映写機	Kinoton FP75ES(70mm/35mm兼用2台)、Kinoton FP38E(16mm専用にカスタマイズしたもの2台)、NEC製NC3240S 4Kプロジェクター	Kinoton FP38E(35mm/16mm兼用2台)、NEC製NC3200S 2Kプロジェクター
映写距離	23.00m	16.60m

公開 展示

本館7階の展示室では、映画のポスター、写真から映画機材、映画人の遺品まで、映画関連資料を用いた展覧会を開催しています。常設展では当館の貴重な所蔵資料によって日本映画の豊かな歴史を紹介、企画展ではさまざまな切り口から映画文化を発信し、関連のトークイベントなども催しています。



写真上・左下 常設展「NFAJコレクションでみる 日本映画の歴史」会場の風景
写真右下 トークイベントの様子

公開 図書

本館4階の図書室では、所蔵する約5万冊の映画図書のうち、和・洋書の単行本、国内外の映画祭図録、また国内外の主要な映画雑誌などを閲覧室で読むことができます。なお、和書の単行本の所蔵については、明治以降日本で刊行された映画図書の約7割に相当します。複写サービスを行っているほか、電子ジャーナルやデジタル化した映画関連資料もご覧いただけます。



上・下 図書閲覧室

公開 コレクションのオンライン公開サイト

国立映画アーカイブでは、所蔵コレクションをはじめ、イベント記録などさまざまな資料・情報をオンラインでも公開しています。

<https://www.nfaj.go.jp/onlineservice/>



国立情報学研究所(NII)との共同構築サイト



日本アニメーション映画クラシックス

日本のアニメーション映画生誕100年を記念し開設したWEBサイト。日本の初期アニメーションを公開。

<https://animation.filmarchives.jp/index.html>



映像でみる明治の日本

日本映画生誕120年を記念して開設したサイト。現存する最古の日本映画『紅葉狩』(2009年重要文化財指定)や『小林富次郎葬儀』(2011年重要文化財指定)を始め、明治期に撮影された日本映画と、失われた「最古の日本映画」のフィルムのコマの画像を公開。

<https://meiji.filmarchives.jp/>



関東大震災映像デジタルアーカイブ

国立映画アーカイブ所蔵の関東大震災関連の映画を公開するWEBサイト。

<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>



フィルムは記録する

国立映画アーカイブが所蔵する文化・記録映画など映画作品を配信するWEBサイト。『史劇 楠公訣別』(2010年重要文化財指定)もご覧いただけます。

<https://filmisadocument.jp/>



映画遺産 — 国立映画アーカイブ映画資料ポータル—

国立映画アーカイブが所蔵する映画関連資料を包括的に公開するWEBサイト。

<https://nfajfilmheritage.jp/>



はじまりの日本劇映画 映画 meets 歌舞伎

国立映画アーカイブが所蔵する歌舞伎関連映画や資料を公開するWEBサイト。

<https://eigameetskabuki.filmarchives.jp/>

所蔵コレクションやイベント記録など様々な資料・情報の公開ウェブページ



NFAJデジタル展示室

ノンフィルム資料の画像を多くの方々に公開するウェブページ。

<https://www.nfaj.go.jp/onlineservice/digital-gallery/>



フィルムアーカイブの諸問題

当館の機関誌「ニューズレター」の連載「フィルムアーカイブの諸問題」のオンラインアーカイブ。

<https://www.nfaj.go.jp/onlineservice/variouschallenges/>



映画製作専門家養成講座

1997-2004年度に実施した「映画製作専門家養成講座」の採録テキストを公開。

<https://www.nfaj.go.jp/onlineservice/yosei/>



マグネティック・テープ・アラート

磁気テープに記録された映像の保存についてユネスコが発した警告に関する情報ページ。

<https://www.nfaj.go.jp/onlineservice/mtap/>



みんなの映画がっこう

国立映画アーカイブの配信サイトで公開している作品を題材に、映画の表現や歴史などを学べるツール。

<https://www.nfaj.go.jp/learn/kids/minnaneoiga/>

国立映画アーカイブが運用するその他のデータベース



全国ロケーションデータベース(JL-DB)

国内のロケ候補地を検索できるデータベース。文化庁事業「全国ロケーションデータベースの利用促進等のための調査研究」で開発・運用され、事業移管により国立映画アーカイブが運用を継続。

<https://jl-db.nfaj.go.jp/>



映画資料所在地情報検索システム(JFROL)

複数館のノンフィルム資料を横断的に検索できるデータベース。文化庁事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業(撮影所等における映画関連の非フィルム資料)」で開発され、事業移管により国立映画アーカイブが運用を継続。

<https://jfrol.jp>

教育普及 こども向けプログラム

国立映画アーカイブでは、こどもたちに、映画という文化芸術遺産の素晴らしさ、楽しさを知ってもらい、豊かな情操と映像への深い理解を育むことを目的に、大きなスクリーンで映画を楽しむ鑑賞教育など、さまざまなプログラムを行っています。

鑑賞教育

こども映画館

スクリーンでの映画鑑賞を通して、映画芸術の素晴らしさ、楽しさを体験してもらい、豊かな情操と映像リテラシーを育むことを目的とした解説付き上映会。弁士・演奏つきでの無声映画上映も毎年行っています。



V4中央ヨーロッパ子ども映画祭

ヴィシェグラード4か国(V4: ポーランド、ハンガリー、スロバキア、チェコ)の大使館・文化機関との共催で、アニメ映画や優れた作品を通してV4各国の文化を紹介する上映会を毎年12月に開催しています。



巡回

こども映画館 スクリーンで見る日本アニメーション!



一般社団法人コミュニティシネマセンターとの共催で、巡回上映「こども映画館 スクリーンで見る日本アニメーション!」を各地で開催しています。

映画の表現や歴史を学べるツール

常設展セルフガイド

常設展「日本映画の歴史」では、中学生以下の方々にセルフガイドを配布しています。クイズを解きながら、「映画大国にっぽん」の歴史をたどることができます。



みんなの映画がっこう

国立映画アーカイブのオンライン配信サイトを見ながら、映画の表現や歴史を学ぶことができます。



教育普及 鑑賞教育・人材育成

国立映画アーカイブでは、多様な観客層を対象とした映画鑑賞教育や、映画保存に関わる講演会やワークショップ、国内外のさまざまな映画関係団体や文化機関との共催事業を行い、映画および映画を通じた文化・芸術や歴史・社会を学ぶ機会の提供、映画保存や教育に関する人材育成を行っています。

多様な観客層を対象とした映画鑑賞教育

館内

こども映画館

V4中央ヨーロッパ子ども映画祭

さがみ風っ子「親子映画鑑賞会」(於:相模原分館)

相模原市研究機関等公開講座 国立映画アーカイブコース



「令和2年度 優秀映画鑑賞推進事業」の会場風景(金沢21世紀美術館)

館外共催

優秀映画鑑賞推進事業(各地巡回)

MoMAK Films(於:京都国立近代美術館)

中之島映像劇場(於:国立国際美術館)

こども映画館 スクリーンで見る日本アニメーション!(巡回)

映画アーカイブに関する人材育成・普及活動

博物館実習

インターンシップ

アーカイブセミナー

ワークショップ

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント



博物館実習の様子



ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント 3D映画の歴史の客席の様子

国際連携

国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)加盟機関との連携・協力を通して国外に散逸した貴重な日本映画を収集、相互に所蔵品を貸与・借用し合うことによって国際的な文化交流を行っています。

国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)加盟機関の連携・協力

FIAF機関の所蔵作品を紹介する近年の特集上映企画

「メキシコ映画の大回顧」(2024年度)

「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」(2023年度)

「アカデミー・フィルム・アーカイブ 映画コレクション」(2022年度)

「香港映画発展史探究」(2021年度)

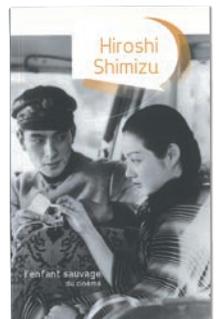
「中国映画の展開——サイレント期から第五世代まで」(2020年度)

「オリンピック記録映画特集——より速く、より高く、より強く」(2019年度)

「アメリカ議会図書館 映画コレクション」(2019年度)

「日本・スウェーデン外交関係樹立150周年
スウェーデン映画への招待」(2018年度)

「日本におけるチェコ文化年2017 チェコ映画の全貌」(2017年度)



2021年にフランスで開催された「清水宏監督特集 Hiroshi Shimizu」(主催:国立映画アーカイブ、シネマテーク・フランスーズ、パリ日本文化会館)

